

## 子どもの余暇とその表象 —パリ市の親への聞き取りから—

小林 純子

### I 課題の設定

子どもの「余暇」にはいかなるアプローチが可能だろうか。「余暇」の概念は、すでに古代ギリシャに存在した。古代ギリシャの都市国家では余暇はスコレーとよばれ、「いっさいの労働から解放されていた市民階級の生活のすべて」<sup>1</sup>を意味し、少数の自由民にとっての政治的議論の時間、神聖な時間、学問・スポーツ・芸術の時間であった<sup>2</sup>。

歴史家アラン・コルバンによれば、「余暇」が「仕事のあとの自由にできる時間」と捉えられるようになったのは19世紀半ばのヨーロッパにおける「労働時間」の変容による<sup>3</sup>。19世紀初頭まで、労働時間は「偶然の出来事や気晴らしのために中断される」こともあり、「比較的ゆるやかで柔軟な」時間で、労働時間と非労働時間の間に明確な区別がなかったという<sup>4</sup>。そのような時間が次第に効率性や生産性、秩序や規律によって区切られ、「測定される時間」となったことから自由時間もまた規定され、満たされるべき時間と認識されるようになった。コルバンはまた、19世紀のエリートが多くが「余暇、すなわち時間が自由になるということは、個人の開花や、調和の取れた主体形成に不可欠なものであると判断した」としている。ここでいう余暇は「無為 (otium)」に近いが「役に立たないことの同義語ではなく、時間を自由にできることが「自分の収入で生活する人間の威信の礎を成している」ということであった<sup>5</sup>。この余暇の意味が、20世紀に入り「通常の仕事に取られていない時間の間に、自発的に身をゆだねるような気晴らし」に移行したことを、コルバンは「余暇からレジャーへの移行」と捉えている<sup>6</sup>。

こうした時間区分は子どもの「余暇」にとっても興味深い。現代の子どもの余暇は、一般に学校の授業時間以外の自由な時間、またはその時間に行われる何らかの活動とみなされるからである。子どもが学校に行き、授業を受けている時間は、「時間割」によって区切られ管理されている。しかし授業が終われば子どもにとっての自由時間となる。夏休みなど学校のない期間もまた自由時間とみなされる。英語で学校を意味するスクール school の語源が、スコレー σχολη というギリシャ語であることを考えれば<sup>7</sup>、本来学校こそが「自由時間」のはずだが、学校から解放された時間が「自由

な「余暇の時間」とみなされるということは、現代の学校はそれだけ高度に制度化され、子どもの時間を拘束するもの、子どもにとって労働のようなもの、あるいは労働生活を準備するための時間という性格を強く帯びたものとしてたちあらわれているともいえる。

しかし近年、学校から解放された時間もまた「放課後」や「学童」として、国や自治体によって積極的に介入され、活用されるべき時間とみなされるようになっていく。様々な放課後活動支援が韓国でも、イギリスでも、ドイツでも、またフランスでも実施されている<sup>8</sup>。どの国でも、活動は多かれ少なかれ学習支援、保育サービスや育児支援、人間性を高めるスポーツやアートの提供といった側面を兼ね備えている。これらの活動は、子どもから見れば「余暇」の一つだが、親から見れば仕事から帰宅するまでのあいだ子どもを預けることのできる場、子育て支援制度の一つとして捉えられる。子育て支援としての余暇活動を利用するかどうかは、多くの場合、子どもにゆだねられた選択肢ではない。両親が共働きの場合には積極的に利用するかもしれないし、共働きであっても祖父母が援助できる場合は家庭で過ごす時間を優先して利用しないかもしれない。コルバンによれば、19世紀の西洋ではボクシング、動物闘技など「無秩序だとみなされた気晴らし」は、個人を豊かにする「合理的」余暇とは区別され、統制の対象となった<sup>9</sup>。たとえばイギリスでは庶民や青少年の余暇を管理したり、教化したりしようとする努力がみられたという。危険な目に会うことのないよう安全な居場所を確保する、あるいは勉強をあきらめ社会に投げ出されないよう豊かな時間を提供するなど、子どもの時間を合理的に管理しようとする取り組みは、現代の放課後活動支援にもみられる特徴のひとつである。このように、子どもの余暇活動の多くは社会的制度や政策のなかに組み込まれている。同時に、子どもの余暇は親の意志や親をとりまく環境から完全に自由な時空間ではない。では、こうした構造のなかにあって現代の子どもは、余暇すなわち学校以外の時間を実際どのように過ごしているのだろうか。

本稿はフランスの事例としてパリ市の親に対する聞き取りを通じ、余暇の時間においてどのような制度が利用され、さまざまな活動がどのように経験されているかを明らかにすることを目的とする。日本ではフランスの子どもの余暇について、国や自治体による子育て支援や保育サービスの充実が指摘されることが多い<sup>10</sup>。そこではフランスの充実した子育て支援の場や選択肢の多様性だけでなく、選択の社会的格差や地理的格差の存在が指摘されている。19世紀のパリには、エリートと庶民のあいだにすでに余暇の社会的格差が存在したことをふまえると<sup>11</sup>、親がどのような余暇活動に携わるかという社会的格差が子どもにどのような余暇活動を体験させるのに関

わっていることは容易に想像できる。しかし子どもの余暇活動の実践を、経済的、地理的、社会的な制約による活動の社会的格差からのみ説明することはできない。たとえば余暇センターやパリ市の提供する学校以外の時間の子どものための活動は、まさに平等の理念に基づいて制度化されている。にもかかわらず、それを利用する親と利用しない親がいる。ある活動が無償で提供され、地理的な制約がないにも関わらず、それを利用しない人がいることにはどのような背景があるだろうか。そこには客観的な基準があるというよりは、それを必要と判断するか不必要と判断するか、あるいはその活動に大いに価値があるか、大した価値はなく別の活動をやらせたほうが良いかという親の主観的な意識や価値付けが関係しているのではないか。ここではこうした意識や判断において、各々が余暇やその諸活動をどのようにみなしているのかを明らかにしたい。

## II 聞き取りの概要と結果

アラン・ブランシェとアンヌ・ゴットマンによれば、インタビューは「行為者が自ら積極的な証人となりうるような出来事すなわち自らの実践に与える意味を分析する場合に最適である」<sup>12</sup>。それはインタビュー対象者の理解や描写から、表象 *représentations* や実践 *pratiques* を明らかにしようとする。このように、インタビューは「行為者の視点に訴えかけ、その生きられた経験と論理、合理性をもっとも重視する」<sup>13</sup>。

本稿がもとにするインタビューは、今後調査を発展的に展開していくための予備的調査として2015年8月にパリ市で6名の親に対して行われた(表1)<sup>14</sup>。インタビュー対象者の数には限りがあり、親の社会的カテゴリーの観点から代表性に欠ける<sup>15</sup>。しかしどのような余暇活動が国や自治体に推奨されているか、余暇のための活動を提供する制度や政策を知るのみならず、それらがどのように利用されているか、それを利用する子どもが学校以外の時間をどのように過ごしているか、親がそのことをどのように捉えているかを知るためには、インタビューは有効な手段である。たとえば、インタビューでは親が把握している子どもの余暇活動を知ることはできるが、子どもの学校以外の時間の過ごし方をすべて把握できるわけではない。親の知らないところで子どもが従事している活動があるかもしれないし、親が何を余暇とみなしているかによって、余暇の示す範囲が異なってくるからである。だがそれ故に、インタビューでは、あらかじめ想定された「余暇」を行っているかどうかではなく、何を余暇とみなしているかが親や子どもによって異なることを明らかにできるのである。

本稿は何らかの理論を検証したり実証したりする目的でインタビューを使用していない。むしろインタビューから明らかになったことをひとつずつ検証し、そのことによって既成の議論の射程や限界を明らかにするものである。

## (1) 余暇の範囲

インタビューの最初の問いは、子どもの余暇活動は何かを問うものであった。ほとんどの親は学校での授業時間以外に子どもが従事している活動を挙げた。これらの活動は読書やローラースケートなど個人的に行うものもあれば、テニスやダンスなど、クラブや自治体が提供するものもある。しかし余暇センターでの活動や、2013年の小学校の時間割編成改革によってパリ市の小学校で火曜日と金曜日に生じた授業後の15時から16時半までの「学校周辺活動」については、利用のある場合でもそれを子どもの余暇活動として最初に答える親はいなかった。

余暇といえるかどうかためらわれながら言及された活動として宗教教育がある。

「これが余暇 *loisir* と捉えられるかどうか分かりませんが、娘には宗教教育をしました。何年間か必要な段階を経て、それが今年完了しました。娘は宗教的な知識をもっています。これからどのように続けるかは彼女が決めることです。…彼女は公立高校に通っています。私は公立学校で宗教教育があったほうがよいとは思いません。[公立学校でも] 宗教に関する情報を得ることはできますから。あらゆる宗教が存在する、子どもがそのことを知るのは大事ですが、後はそれぞれの親が子どもの発達を助ければよいことでしょう。」(ロワイヤルさん)

フランスではライシテの原理にしたがって公立学校や公共機関は特定の宗教に関連した教育や活動を行わない。そのため私的な場では信仰の自由が認められると考えられている。このように公的な場と私的な場を分けるという考え方は、子どもの余暇活動にも通底している。子どもの余暇活動はすべてが私的な領域に属するものとは限らず、余暇センターでの活動や市町村が提供する諸活動にはライシテの原理が適用される。ロワイヤルさんは子どもに私的な領域で宗教教育を与えることが、子どもの発達を助けると考えている。ここでは個人を豊かにするものとして、学校教育とは異なる「教育」もまた余暇と捉えられている。

いっぽう、子どもには質問を分かりやすくするため、学校が終わったあと何をしているかをたずねた。余暇活動として宿題やテレビを挙げる親はいなかったが、二人の

中学生の放課後には宿題への言及が多くみられた。

「家に帰って、宿題をやると思う。いつもは家にいます、家にいるのが好きだから。たまにパスタをつくったり、洗濯物をたたんだり、例外的によく勉強したらテレビを観ます。これは例外的だけど。そのうちお父さんが帰ってきて、妹も帰ってきて…。あとは日によります。別の活動をしている日もあるから。たとえば去年の火曜日の午後は家に帰ってサッカーの支度をして、宿題をやってからバスに乗ってスタジアムに行っってサッカーをしていました。」（マイヨールさん長男、中学生）

「[余暇活動のない月、火、木の放課後は]家で一人で宿題をやります。金曜日の夕方はだいたいテレビをみます、良くないことだけど…」（ソレルさん、中学生）

またかれらはテレビを観ることを宿題のあとの気晴らしのように捉えており、それをあまり良くないことと認識している。それでも、両親が共働きのソレルさんと、離婚した後も働いているマイヨールさんの長男は、それぞれ演劇、乗馬という活動、サッカーという活動をしていない日は家で過ごすため、勉強以外の気晴らしはテレビとなる。今回のインタビューでは質問項目にないことであったが、スマートフォンやインターネットの普及に着目すれば、子どもの年齢によってはそれらを所有しているかどうか、所有している場合はどの程度使用しているかをたずねることも重要である。親の中には子どもの余暇活動のひとつとして、ソーシャルネットワークサービス SNS の利用を挙げるひともいるためである。

「ソーシャルネットワークに関連した余暇もたくさんあります。…娘はフェイスブックに参加していますし、これはプライベートな活動ですが、多くのメールアカウントを使用しています。」（ロワイヤルさん）

ロワイヤルさんに限って言えば、ソーシャルネットワークサービスに関連した活動はポジティブに受け止められている。SNS の利用はテレビとは異なり、自ら参加する活動として捉えられている。

このように、子どもの余暇はたいいていの場合、スポーツや音楽など自らが携わる何らかの活動を指すことが多いが、中には宗教教育など極めて教育的な活動もあれば、テレビなど気晴らしに近いものもある。

## (2) 余暇センターの表象

余暇センター *centre de loisir* の名をもちながら、余暇 *loisir* として最初に言及されることのないこの施設での活動は、利用したことがあるかどうかをたずねて初めてインタビューのやりとりに登場する。余暇センターは水曜日の午後や夏休みなど、学校で授業のない時間に集団で子どもを受け入れる施設で、保育学校の児童を受け入れるセンターと、小学生や中学生を受け入れるセンターがある。2010年の資料では、3万のヴァカンスセンター *centre de vacances* と3万3000の余暇センター *centre de loisirs* にあわせて400万人の子どもが受け入れられている<sup>16</sup>。これら二つの施設は、「社会活動家族法典 *code de l'action sociale et des familles*」では、「教育的性格を有する未成年の集団的受入 *accueils collectifs de mineurs à caractère éducatif*」のカテゴリーに属するものである。

余暇センターの成り立ちとアニマトゥールの役割を歴史的・社会的文脈において明らかにしたフランシス・ルボンによれば、1970年に登場した余暇センターは、活動家教員や「ご婦人がた」、「管理人さん」、「おばあちゃん」、「編み物をする女性」、「若い女性」などに代わる専門職アニマトゥールによって、単なる「託児所」を越えた教育的空間あるいは「アニメシオンの場」となっていった<sup>17</sup>。その過程では、子どもの「喜び」、「自律」、「創造」、「表現」を重視するミドルクラスの教育概念を反映した「余暇」によって、それまであいまいな様相をしていたさまざまな実践が合理化された活動となり、そしてその制度化が進行した。こうした背景から、本稿のインタビューでも余暇センターをある種の「学びの場」として極めてポジティブにとらえる親もいた。

「それも彼女の余暇の一部でしたね、あそこでたくさんのことをしていましたから。…私たちは二人とも働いていたので、必要に迫られてということもありましたが、[娘を余暇センターに行かせるということは] 選択でもありました。集団 *collectif* のなかで他の子どもたちと一緒にいられること、参加すること、発見の手段を学ぶこと…。」  
(ロワイヤルさん)

しかし余暇センターは、他に子どもの面倒をみる手段がない場合の代替的な措置として活用されていることのほうが多い。

「学校のあと、娘は余暇センターに行きます。息子もそうです。そうすることが必要だからです。私の仕事は18時に終わるので、仕方ありません。夫は15時に仕事が終わりますが、そこから学校に行く時間を考えると、学校が終わったときに子どもを

迎えに行くことは出来ないのです、やむなく余暇センターに預かってもらうしかありません。」（ミシュレさん）

「[もし子どもの父親が水曜の午後に空いていなければ] 私が職場に水曜午後を空けられるか聞くとします。それも無理なら息子は余暇センターですね。その場合 [送り迎えが出来ないので] スポーツはできません。そうなったらどうすればいいか、わかりません。」（デュポンさん）

必要性に迫られていない場合、あるいは他に手段がある場合、あえて余暇センターを利用する親はあまりいなかった。パリ市学校教育課支部の提供資料によると、2012年初等教育登録児童（保育学校と小学校を含む）は136,540人であり、このうち水曜日の余暇センター利用者は28,000人であった<sup>18</sup>。およそ2割の子どもが余暇センターを活用していることになるが、その他の子どもは余暇センター以外で提供されている活動を行うか、それぞれの家庭で時間を過ごす。

「…余暇センターにはもうほとんど行っていません。あまり行きたがらないというのがあります。…共同体 *collectivité* は重いものでもあります。…学校で過ごす時間だけでも多いのですから、子どもたちは疲れますよ。火曜日と金曜日は学校での勉強時間が少し短いとはいえ、学校で過ごす時間は減っていないのです。放課後15時から16時半まで学校で実施されている学校周辺活動があるからです。そのあとは学習支援やおやつの時間もありますが、それも学校です。学校はやはり騒々しいですから、子どもたちが大きな声を出したりして、とても疲れるところだと思います。息子は静かなところが好きなのです。」（デュポンさん）

「子どもたちは余暇センターにも夕方の学習支援にも行きませんでした。彼らが行きたがらなかったからです。下の子は、小学生の頃少し通いましたが、保育学校時代はふたりとも一度も通いませんでした、一度もね。必要がなかったのと、二人の祖母がパリにいたことがその理由です。どちらかが学校のあと子どもを迎えに行っていました。共同体 *collectivité* は良いことで多くのことを学ぶことができますが、常に集団のなかで学ぶのはくたびれます。」（ドゥニさん）

「[余暇センターでの] 時間割は複雑だと思います。息子は早く起きなければならないし、一日中というのはやはり少し疲れると思います。」（ブリューノさん）

ロワイヤルさんの評価とは異なり、ここでは余暇センターがもつ集団性、すなわちたくさん子どもとともに過ごすこと、規則や時間の管理が厳格であることは、子どもにとって「重いもの」、「くたびれるもの」として、あまりポジティブにとらえられていない。確かに、夏休みに余暇センターに子どもを預けるには、午前8時20分から9時の間にセンターに行き、帰りは18時（保育学校余暇センターの場合は18時半）に迎えに行かなければならない。この時間を、自分の都合でずらし、遅刻したり早退したりすることは原則的にはできない。子どもにとっても、この集団性が「楽しいもの」として経験される場合もあれば、「つらいもの」となる場合もある。

「[余暇センターには]よく行っていました。好きだったので。余暇センターはとてもいいところです。たくさん活動をしていて、プールに行ったりして、アニマトゥールは大きな校庭でいろんなことを考え出してくれてとても良かったです。…今は行っていません。[年齢的に]行けたはずだけど、普通は小学生が行くものだから。」（マイヨールさん、長男）

「両親が仕事をしていて私の面倒を見られなかったから、余暇センターを利用していました。でも2、3年の間ひとりぼっちだったから嬉しくはなかった。小さい子ども用の活動が多かったです。あまり良い思い出はありません。」（ソレルさん）

余暇センターが少なくとも中学生にはもの足りない、小さな子どもを相手にしている場所ととらえられる背景には、こうした集団的な子どもの受け入れ措置が、実際低年齢層に偏っているという事実がある。自身アニマトゥールでもあり、現在はアニメーション領域の管理運営の立場にあるロワイヤルさんは、「年齢のより高い子どものための措置はあまり存在しない」ことを指摘している。

このように、余暇センターは小さな子どもが親の都合でまとめて預けられる場所としてのイメージが依然として強い。こうした表象は、余暇センターが地理的な制約なしに存在し、利用料金も親の収入に配慮して設定されているにもかかわらず、なお利用されない事実を説明しているのではないだろうか。

### (3) バカンスと余暇

学校授業期間中の水曜の午後に余暇センターを利用する親であっても、夏休みにそれを利用する親はまれであった。夏休みは「なんとかして余暇センターで過ごすのは別の過ごし方をしてもらえるように」（ブリューノさん）祖父母の家で過ごしたり、少なくとも親のどちらかが休暇をとって子どもと過ごしたりする。

「子どもたちは毎週水曜の午後に余暇センターに行きますが、逆にどのバカンスでも余暇センターには行きません。私と夫で1週間ずつ休みを取るのので、兄の住む地方に子どもと出かけます。あるいは子どもたちは父親と海に行ったり、プールや映画館に行ったり。」（ミシュレさん）

ただし「アルゼンチンや北米など」（マイヨールさん）毎年遠距離にある国にまで旅に出かけることのできる経済力をもった家庭もあれば、バカンスに出かけるといっても、自宅以外のフランス国内の家族宅に滞在するだけの家庭もある。

「息子はこの夏休みは田舎の海の近くの祖父母の家で父親と過ごしています。」（デュボンさん）

子育て支援の制度が整っているように見えるフランスでも、両親だけで子どもの面倒をみることには限界があり、バカンスに限らず、学校授業期間中でもとりわけ集団的受入措置を利用しない場合は、祖父母を頼ることもまれではない。

「[以前は水曜に学校がなかったため、余暇センターを] だんだん朝だけ利用するようになりました。そうすれば午後はおばあちゃんが迎えに行き、子どもたちを[余暇センターとは別の] 活動に連れて行ってくれます。パリではよく行われていることですが、おじいちゃん、おばあちゃんによく『タクシー』をやっていますよ。」（マイヨールさん）

親は自分の仕事の都合でやむなく子どもを余暇センターに預けることに満足せず、子どもの余暇を豊かにしようとするほど集団的受け入れ措置だけに頼ることを避ける。自分の時間に都合をつけやすいバカンスにおいてはなおさらである。だが、家族でバカンスを過ごすことは必ずしも「恵まれていること」とはいえない。

イザベル・モンフォートによれば、バカンスに出かける子どもの割合は安定しているが、バカンスの過ごし方において不平等が進行している<sup>19</sup>。すなわち、「もっとも恵まれた子どもたちは家庭での経験、集団の経験、自律の経験などの多様性を享受できるが、その他の子どもたちは両親と過ごす経験だけに限られる」のである<sup>20</sup>。実際2000年頃にはフランス人全体では6割が、19歳以下では7割がバカンスに出かけ、2011年、「5歳から19歳までの子どもの75%が少なくとも年に1回、4泊以上の滞在を経験している」<sup>21</sup>。また、「月収が2000ユーロを下回る世帯の子どものうち、少なくとも1回両親とバカンスに出かけた子どもの割合は2004年から2011年に15ポイント上昇している」<sup>22</sup>。モンフォートはこうした家族で過ごすバカンス形態が一般化していることを、親のバカンスに出かける割合が安定していることの「ポジティブな変革の帰結」とは捉えていない。貧困層では、その3分の1がコロニー（集団でバカンスを過ごすしくみ）を子どもに体験させたいと考えているにも関わらず、参加に必要な費用が高く実現できないと回答している家庭が、恵まれた層の家庭よりも多いためである。コロニーは市町村の提供するものもある。たとえば、パリ市は「虹のバカンス vacances Arc-en-Ciel」を提供しているが、参加料は所得等を考慮した家族係数に応じて決められており、2016年の場合、12日間のコロニーに参加するために25.44ユーロを支払う家庭もあれば、692.88ユーロを支払う家庭もある<sup>23</sup>。これは収入が少なかったり家族が多かったりする家庭への配慮だが、アソシエーションや企業が提供する「コロニー」には、高額な参加費を必要とするものもある。たとえば、コロニーを紹介するウェブサイト「123 séjours」では、500以上のコロニー組織が、1万以上のコロニーを提供する<sup>24</sup>。参加費は年齢、滞在期間などに応じてさまざまで、300ユーロのものもあれば2000ユーロを越えるものもある。また「Telligo」はスポーツ、外国、言語など、テーマに応じた滞在を提供しており、そのウェブサイト上で希望する期間や日付、場所などを入力すれば適切な滞在プランを自動的に検出してくれる<sup>25</sup>。ここでは、コロニーはパッケージ化され、商品化されている。このようなコロニーに参加することは、バカンスの過ごし方を多様な経験から成り立たせるための構成要素のひとつともなりうるが、ともすれば参加費を支払うことのできる子どもだけが集まり、同一の経験を共有する同質的集団の強化にもつながりかねない。むしろ、参加費を支払うことのできない家庭は、このような「コロニー」には参加できない。

モンフォートによれば、家族滞在がバカンスの唯一の形式であった子どもは、「2011年にバカンスに出かけた11歳から13歳の子どもの3分の2、14歳から16歳の子どもの60%、17歳から19歳の子どもの半数以上」にのぼる<sup>26</sup>。こうした家庭でのいわば「近しいもの同士だけのバカンス」は1980年代ころからの傾向ではあるが、今日

ますます支配的になっているという。インタビューから明らかになった親の考え方は裏腹に、余暇センターなどの集団的受け入れ措置を利用せずに家族でバカンスを過ごすことは、それ自体が必ずしも恵まれていることであるとは言えないのである<sup>27</sup>。

#### (4) 余暇と子どもの将来

子どもの「余暇」に「勉強」を挙げる親はいなかったが、学校が終わってからの時間の過ごし方をたずねると、バイリンガル学校に通わせたり、また塾を利用したりするなど、学校での勉強に強く関連する活動を挙げる親もいた。個人差もあるが、とくに中学生は小学生に比して宿題や予習に費やす時間が増える。高校生になると学校ごとの序列が明確になってくる上に、受験しようとするバカロレアに応じて課程が分かれ、その後の進路における汎用性が高いとされる理系バカロレア課程では学業上の成功が難しいため、子どもは学校以外の有償教育措置、いわゆる塾や家庭教師を利用することもある。

「…長男は高校の3年間に家で数学の先生から週2時間の授業を受けていました。…パリではいろいろな高校があって、子どもに全員バカロレアを取ることを望む要求の高い高校もあれば、とくに補習などをやる必要のない普通の高校もあります。私の子どもたちは結構レベルの高いリセに入ったから、その高校では多くの子どもが家で復習教員 *répétiteurs* にみてもらっていますよ。復習教員というのは大学生とか先生とかね。…『アカドミア』[日本の塾に相当する教育機関]のような有名な教育機関もあります。次男はそこで高校の理系バカロレアコースに入るために研修をやりました。6人ごとの集団学習を選びました。効率的だと思うし、子どもは他の子どもと一緒に勉強した方がやる気も出るでしょう。」（ドゥニさん）

ドゥニさんは子どもに「これをやりなさい」とか「こうなって欲しい」と言ったことは一度もない。長期間に渡って学業に従事したいと考える子どものために、「バカロレアをとるため」の「手段」を提供したいと考えてきた。だが、子どもにやりたいことをやらせるために提供すべき「手段」が何かを判断するのは親であり、そこに格差が生じてくる可能性はあるだろう。

聞き取りの対象者のなかに、とくに子どもが小学生や中学生のうち、かれらが特定の職業につくことを希望する親はいなかった。むしろ子どもの将来に「賭ける *miser sur la tête de ses enfants*」ことは良くないこと、子どもの将来は子どもが自分で決めることだと考えている（ドゥニさん、ロワイヤルさん）。しかしそれが将来

に役立つと考えたり、子どもが希望したりしたものは、余暇の時間（ここでは学校以外の時間）も活用し、それに関連した余暇を行わせている。

「娘の余暇活動は彼女が職業的にやりたいと思っているものと結びついています。彼女はコーラス、ピアノ、バイオリンをやっています。…それぞれを1週間に1回ずつ、コンセルヴァトワールでやったり先生にみてもらったりしています。」（ロワイヤルさん）

ロワイヤルさんは、子どもの将来は「子どもが選び取るもの」と考えている。そのなかで「成功」し「開花」できるよう、余暇もまた娘の選んだ音楽の道に関連したものが多し。たとえば、夏休みは、「音楽ヴァカンスセンターとよばれるところで、他の子どもや大人と楽器を練習したり、歌ったり、コンサートを開いたりしながら」過ごす。このセンターはアソシエーションによって運営され、アニメーターや音楽の先生も参加する。ロワイヤルさんはこうした機関を統括する人物と知合いで「連絡を取り続けていた」ことから、情報の提供を受け、パンフレットを取り寄せた。

このように、子どもの余暇は単なる「気晴らし」からのみ成り立っているのではなく、将来に関連した教育的活動と結びついていることもある。しかし子どもの将来と結びついた余暇活動は、すべての親に共通の実践とは限らない。たとえば、音楽家を目指す子どもが、バイオリンやピアノのレッスンを希望しても、楽器を買ったりレッスン料を支払ったりする経済的な余力や、コンセルヴァトワール、研修、音楽教師などに関する情報量は親において一様ではないため、希望を実現できるかどうか、それをどのように実現しているかは、親によって異なってくるだろう。その意味で、親の社会階層に応じた子どもの余暇活動への関わり方の違いは、今後明らかにしていくべき課題といえる。

## (5) 子どもの余暇活動と親の影響

親がある特定の余暇活動を子どもに意識的に強制することはあまりない。たとえばデュボンさんは「子どもとよく話し合っているので、かれには何も強制しない」。子どもの余暇活動は純粋に「子どもの嗜好 *goût*」の結果であると考えられている。たとえばフェンシングという余暇活動の選択は、剣をもってたたかうもののイメージに憧れた子どもが「変装」をのぞんだ結果で、それはデュボンさんの嗜好とは関係がない<sup>27</sup>。だが、かれには音楽という余暇活動もあり、それはまさにかれの父親がミュー

ジシャンであることから影響されたものといえる。

「彼はロックが好きですが、父親がミュージシャンなので、むしろフリージャズといったほうが良いかもしれません」（デュボンさん）

子どもの余暇活動がたとえ親の嗜好でないとしても、親の兄弟や祖父母など身近な家族や親族の嗜好に関連している活動であることは少なくない。

「実は私の母と兄が乗馬をやっていて、子どもたちはそれを見て、乗馬をやりたくなったのですよ。試してみたら喜んだので続けています。…私は乗馬が恐いから嫌いだけれどね。」（ミシュレさん）

「英語をやらせています。娘の祖母〔義理の母〕は会議通訳だったから。スペイン語、フランス語、英語のトリリングルですよ。だから彼女は孫に外国語を学んでほしいのです。私にとってもそれは大事なことだったので、同意しました。」（マイヨールさん）

また、子どもが小さいうちは何かを手本として示す必要があり、そのあとそれを続けるかどうかを子どもが決めればよいと考える親もいるが、そこでは子どもにある種の親の「嗜好 goût」が伝わっている。むろん、親がまったく嗜好しない活動を子どもが始める場合もあるが、多くの嗜好は親から受け継がれ、そして親のそれに極めて類似している。

「私の妻はパリの水泳チャンピオンだったもので、それで子どもに泳ぎを教えたのですよ。いわば水泳の嗜好を与えています。…私はテニスとローラースケートをやりますが、子どもたちに見せて、あとはかれらの自由な選択です。子どもにかれらがやりたくもない余暇活動を強制することはできないというのが私の考えです。」（ドゥニさん）

「…私たちはある種の嗜好を与え、発見させ、やる気を与えましたが、あとは彼女が選ぶものです。大体の活動は続けてきましたが…」（ロワイヤルさん）

ロワイヤルさん自身もまた水泳、ダンス、歌、演劇、人道的活動などを余暇活動としており、子どもの頃はピアノやダンスや水泳をやってきた。彼女の夫も読書やソーシャルネットワークサービスの利用を余暇活動としているが、これらの活動は子ども

の余暇活動と多くの共通項を見いだせる（表1）。

なかには子どもの余暇活動を親の活動の「模倣」とみる親や、ある種の活動は子どもの意見を聞かずに行わせている親もいる。ブリューノさんの趣味は読書や小説、時評などの文章書きである。彼女の息子の余暇活動には読書や物語書きがある。

「私は自分で物語を書きますが、息子はそれをよくみているし、いろいろと聞いてきます。だからある種の模倣だと思う。うちはあまりテレビをみないし、本がたくさんあるから…」（ブリューノさん）

マイヨールさんの場合は剣道をやっていたこと、自分自身が日本語とフランス語のバイリンガル、子どもたちの母親がアルゼンチン出身でスペイン語も話すことから、剣道と言語は子どもに「課した」活動である。

「子どもに課した活動もあります。たとえば言語。あとは何か始めたら子どもたちには最後まで続けてほしいですね。」（マイヨールさん）

このように、子どもの余暇活動は親の影響から完全に自由であるというわけではない。むしろそれは親の意思や嗜好からのみならず、親が子どもに余暇活動を提示できるかどうか、活動のための送り迎えをできるかどうか、活動のための費用を捻出できるかどうか、自分以外に子どもの面倒を頼めるネットワークをもっているかどうかなど、親のもっている情報量、経済的環境、労働環境、社会的環境にも影響を受けている。たとえ子どもが選んだように見えても、子どものころに親から与えられた嗜好は社会的に形成されたものであり、その意味でも親をとりまく社会的環境から影響を受けているといえる。

### III 結論

本稿は、パリ市の親と子どもに対する聞き取りを通じて、子どもはどのような余暇活動に参加しているのか、親や子どもによって余暇活動はどのように捉えられているのかを検討した。

II (1) では、各々が「余暇」とみなしている範囲の流動性が明らかになった。余暇は外国語教育であれ宗教教育であれ、教育活動を含む活動として捉えられているこ

ともあれば、テレビを見るなど気晴らしとして描写されることもあった。Ⅱ（2）では、親が余暇センターに持っているイメージと、実際に余暇センターが目指してきたものとのズレが明らかになった。学校のない水曜日の午後や、夏休みなど授業のないバカンス期間中に子どもを受け入れる余暇センターは、集団で学ぶことの教育的価値ゆえに子どもをもつ親に積極的に選択される場合もあるが、多くはやむを得ず子どもを預ける場として捉えられており、とりわけ夏休みは家族で過ごすことが重要視され、利用されることは少ない。これらの結果は、子どもの余暇の全体像を「放課後」や「学童」など、国や自治体が積極的に関与している施策からのみ把握することの限界を示している。

いっぽう、Ⅱ（3）（4）（5）では、親のもつ子どもの余暇活動に対する考え方と、余暇に関する客観的な観察や分析とのズレが明らかになった。たとえば、余暇センターに子どもを預けなくてすむこと、家族でバカンスを過ごすことが必ずしも恵まれた状況であるとはいえず、むしろ家族で過ごすバカンスにも経済的格差、情報量の格差から生じる大きな格差が存在する。子どもの余暇活動すべてを親の意向で決まるもの、親が強制するものと考えるひとはほとんどいない。だが、実際には親の嗜好や実践が子どもの余暇活動として繰り返されることは多い。こうした嗜好や実践の差異が、親の社会的環境や経済的環境に関連した格差にどの程度つながっているかは、親の社会階層に応じた余暇活動の違いや子どもの余暇活動への関わりに関する調査を待たなければならないが、これらの結果は、社会的な格差が子どもの文化活動やスポーツなどの学校外活動においても顕著にあらわれることを明らかにしてきた既成の議論に通ずるものである。

本稿には異なる家庭環境、社会環境をもつ子どもの余暇の比較が課題として残された。今回の聞き取りでは、家庭環境の類似している子どもの余暇の過ごし方が対象となったが、これらの家庭環境と異なる子どもの余暇は、どのように経験されているだろうか。また、子どもの余暇活動をどのように捉えるか、どのような活動に価値を見いだすか、それらのことがある一定の社会的な範囲で構築されるものでもあるとすれば、それが異なる地域でも同じように見いだせるかどうかは検証に値するであろう。

## 注記

本稿は JSPS 科研費 25870878 ならびに 2015 年度南山大学パツへ奨励金 1-A-2 の助成を受けた研究にもとづく成果の一部である。



- 1 瀬沼克彰『現代余暇論の構築』学文社 2002 年 p. 23.
- 2 渡辺潤編『レジャー・スタディーズ』（藺田碩哉「1 余暇」）世界思想社 2015 年。
- 3 アラン・コルバン（渡辺響子訳）『レジャーの誕生 [新版]』（上）藤原書店、2010 年。
- 4 同上、 p. 14. 「仕事をしながら酒を飲み、たばこを喫い、雑談をした」労働者や職人、「定期的にビールを飲みに行った」建設業者、「仕事を離れて干草を作りに行ったり、自分の土地の作物の収穫に行ったりした」鉦夫など。
- 5 同上、 p. 69-70.
- 6 同上、 p. 73.
- 7 瀬沼、前掲書、渡辺、前掲書。
- 8 明石要一、岩崎久美子、金藤ふゆ子、小林純子、土屋隆裕、錦織嘉子、結城光夫著『児童の放課後活動の国際比較』福村出版 2012 年。
- 9 アラン・コルバン、前掲書、 p.11-12.
- 10 星三和子「世界の子育て事情（4）：フランスの子育て支援、子育て支援」『幼児の教育』2014 年 p.30-36. (online) <<http://hdl.handle.net/10083/47966>>（参照 2016-01-11）、赤星まゆみ「フランスの幼児教育・保育と子育て支援」『日本福祉大学子ども発達学論集』第 4 号 2012 年 p.47-66. (online) <<http://id.nii.ac.jp/1274/00001223/>>（参照 2016-01-11）大庭三枝「フランスにおける保育学校（L'école maternelle）の果たす役割」『福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報』（5）2008 年 p.109-114. (online) <<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007144826>>（参照 2016-01-11）など。
- 11 アラン・コルバン、前掲書（第 4 章ジュリア・クセルゴ「都市の余暇の広がりの変動」）。
- 12 Blanchet A. et Gotman A., *L'Entretien*, Armand Colin, 2006, p. 27.
- 13 *Ibid.* p.23
- 14 本稿で使用する親や子どもの名前はすべて仮名。ソレルさんはマイヨールさんの子どもたちの友人で中学生である。マイヨールさんとのインタビューにはソレルさんを含む子どもたちも加わった。またソレルさんの父親とマイヨールさんの父親が知合いで、夏休みを利用して遊びにきていたソレルさんにも父親の許可を得てインタビューを行った。
- 15 インタビューはマイヨールさんとソレルさんを除き、同じ職場のアニマトゥールたちのなかで子どもをもつ親を対象とした。デュボンさん、ドゥニさん、ロワイヤルさんはアニマトゥールでもあるが、現場で子どもと接する仕事ではなく人事、会計、企画などの事務職に携わっている。

- 16 Busy J-G. « Qu'est-ce qu'on enseigne dans les centres de vacances et dans les centres de loisirs ? » *Informations sociales* n°161, CNAF, 2015, p.70-78. (online) <<http://www.cairn.info/revue-informations-sociales-2010-5-page-70.htm>> (Consulté le 2016-01-11).
- 17 Francis Lebon « Une politique de l'enfance, du patronage au centre de loisirs », *Education et sociétés* N° 11, De Boeck Supérieur, 2003, p.135-152. (online) <<http://www.cairn.info/revue-education-et-societes-2003-1-page-135.htm>> (Consulté le 2016-01-11).
- 18 « Le projet éducatif territorial parisien »
- 19 Monforte I. « De l'entre-soi familial à la sociabilité : un enjeu pour les vacances des enfants et des adolescents », *Informations sociales* n° 181, CNAF, 2015, p.20-28. (online) <<http://www.cairn.info/revue-informations-sociales-2014-1-page-20.htm>> (Consulté le 2016-01-18).
- 20 *Ibid.* p.20.
- 21 *Ibid.* p.21.
- 22 *Ibid.* pp.22-23.
- 23 « Vacances Arc-en-Ciel » <<http://www.paris.fr/arc-en-ciel>> (Consulté le 2016-01-18).
- 24 « 123 séjour : le portail référence des colonies de vacances » <<http://www.123sejours.com>> (Consulté le 2016-01-18).
- 25 « Telligo » <<http://www.telligo.fr>> (Consulté le 2016-01-18).
- 26 Monforte, *op.cite.* p.23 .
- 27 この「子どもの嗜好」そのものも社会的に形成されているかもしれない。たとえば、これは「男の子の」読みもの、これは「女の子の」テレビ番組、あるいは男の子らしい格好、女の子らしい服装など。